

Interview

医系技官を目指す皆さんへ

今、このパンフレットを手に行っている皆さんは、「医系技官」という未知の職業に興味を抱きつつ、ページをめくっているのではないかと思います。なかには、臨床や研究の道に進むべきか、医系技官の道に進むべきか、真剣に悩んでいる方もいるかも知れません。ここでは、医系技官の大先輩である外口崇医政局長に、御自身の経験に基づいて医系技官の魅力などについて伺いました。



厚生労働省医政局長

外口 崇（とぐち たかし）

昭和58年 厚生省入省（大臣官房統計情報部管理課疾病傷害死因分類調査室長）
昭和61年 保険局医療課長補佐
昭和62年 大分県環境保健部保健予防課長
平成2年 大臣官房国際課長補佐
平成5年 石川県厚生部長
平成8年 薬務局企画課血液事業対策室長（9年から医薬安全局血液対策課長）
平成10年 医薬品副作用被害救済・研究振興調査機構研究振興部長
平成13年 老健局老人保健課長
平成15年 大臣官房参事官（政策医療・医薬食品担当）
平成16年 医薬食品局食品安全部長
平成17年 大臣官房技術総括審議官
平成18年 健康局長
平成19年 現職

なぜ、厚生労働省の医系技官をえらんだのでしょうか。

学生時代に公衆衛生の実習レポートを書くために当時の厚生省を訪ねた際に、丁寧な説明と参考資料をいただき役所には良い印象を持っていました。臨床にも研究にも興味があったので入省したのは卒後7年目です。その間、内科医としてのアルバイト先が厚生省の医務室だったことから、医系技官の役割について熱心な説明を受ける機会もあって、入省試験を受けました。

入省後、実際に仕事についてみていかがでしたか。

最初に配属されたのは統計情報部で、行政施策の羅針盤ともいわれる統計調査の正確性を保つために、たいへんな努力を重ねていることを知りました。初めは役所の文化に馴染めなくて、大学に戻ろうかと迷ったこともあ

りましたが、次第に仕事がおもしろくなって、長期展望に立つて行うマクロレベルでの医療、事務官や他職種の技官等とチームを組んで総合力で立案する施策等に、やりがいを感じていきました。

これまで経験された仕事の中で、特に印象に残っているものはありますか。

湾岸戦争のときに国際課課長補佐、エイズ訴訟和解の後に血液対策課長、輸入牛肉再開協議のときに食品安全部長、新型インフルエンザ対策行動計画策定のときに技術総括審議官でした。いずれも政府全体の課題でもあったので印象に残っています。また、NHKスペシャル「日本のがん医療を問う」に二晩出演して、患者さんや医師に囲まれて対話した際は、がん医療についてダンボール一箱分の事前勉強をし、まずは相手の立場にたって考えることの大切さを痛感しました。

医系技官の仕事の魅力は何だと思われますか。

入省当時、尊敬する上司と会食した際に、「小医は病を癒す、中医は人を癒す、大医は国を癒す。」という言葉があると教えられました。「国を癒す」という志を持つ立派な臨床医はたくさんいますが、直接、国の制度づくりに関わる機会は限られています。よりよい保健・医療・福祉を実現するためには、国全体を対象とし、長期展望に立った医療施策・衛生行政を担当する専門家が必要です。我々医系技官には、その役割と使命があると思っています。

また、多くの分野の仕事を経験できるのも魅力です。国際保健、危機管理、地域医療、先端医療、医薬品開発、食品衛生、予防医療、医学教育、医の倫理等と担当分野の幅は広いです。自治体へ出向できることも良い経験で、私も大分県健康対策課長、石川県の厚生部長のときに家族で赴任しましたが、大分県、石川県を家族ともども第二の故郷と思っています。

どのような「医系技官」を理想とすれば良いのでしょうか。

医系技官には、行政官としての能力と技官としての見識を兼ね備えていることが求められていると思います。行政官としては、将来構想力、win-winの関係を目指す調整力、生活感のある市民感覚が、技官としては科学的判断能力や最新の医療知識が必要です。行政は、個人よりも組織で行う仕事ですのでチームワークは何よりも大切です。

最後に、医系技官を志す方に一言お願いします。

日本の医療の現状に問題意識を持つ方、途上国の健康水準を改善したい方、全国レベルで予防医療を推進したい方等、厚生労働行政に関心があり社会のために働きたい方は、まずは厚生労働省を訪問してください。行政は未来を創る仕事です。



(聞き手：柏木知子)